学苑　第九五三号　二四～三八（二〇二〇・三）

戦時下の詩誌『新詩論』

猪熊雄治

Ⅰ

先の拙論[1]で触れたように、戦時下の昭和十九年六月、有力詩誌の統合により、『日本詩』（昭十九～二十一）、『詩研究』（昭十九～二十一）が創刊され、詩誌の刊行はこの二誌のみとなった。このうちの『日本詩』は、『令女界』（大十一～昭十九）に五詩誌を統合させ、改題させる形で創刊されたが、その五詩誌の一誌として今回採り上げる『新詩論』があった。

昭和十七年二月から十八年十一月まで、アオイ書房を発行所として計二十一冊刊行された『新詩論』は、前年まで『新領土』（昭十二～十六）の編集同人をしていた村野四郎と、当時『ＶＯＵ』（昭十～十五）の後継誌『新技術』（昭十五～十七）を編集していた北園克衛が共同編集した詩誌として、「戦時中のモダニズム詩人達の動向を知る上では、欠かせない資料の一つ」（高橋新太郎）[2]との評価を受けながらも、ジョン・ソルト[3]が指摘する通り、希少性もあり言及される機会も少ない詩誌だったと言える。しかし一方では、三省堂の『現代詩大事典』での解説（黒坂みちる）[4]のように正確な書誌情報の報告や特質等についての概観もなされ、またジョン・ソルトの北園研究に『新詩論』の記述が活用される等、高橋の想定した方向でも成果が見られたように、『新詩論』への視線は徐々に広がりを見せつつある。拙稿では『新詩論』の注目点を確認するとともに、あわせて終刊までの二十一冊の目次を紹介することとしたい。

Ⅱ

『新詩論』の創刊については、『新技術』三十五号（十七年二月）の末尾「ＶＯＵ通信」欄に次のような記述があり、五十六号（十七年一月）まで続刊されていた『新領土』の後継誌として発刊されている。

> ＶＯＵクラブ員北園克衛は村野四郎氏と共同編輯で『新詩論』を二月号より発行する。右は『新領土』を廃題しアオイ書房より発行することとなつたものである。今後同誌は一般の純粋詩誌として各方面よりの寄稿に依り活発な活動を行ふ予定である。

『新領土』は、五十号（十六年七月）で四十八号（十六年五月）に遡って終刊宣言がなされたものの、アオイ書房の志茂太郎を「編輯兼発行者」とする『新領土』が号数を継承し、五十一号（十六年八月）から五十六号（十七年一月）まで六巻が刊行されていた。『新詩論』は、『新領土』同様、

志茂太郎を「編輯兼発行者」とした月刊十六頁（五十六号のみ八頁）構成で発刊され、『新領土』の号数を引き継いだため、創刊号は第五十七号と表示されている。

形式的には『新領土』の後継誌であったものの、『新詩論』の寄稿者メンバーを見れば、確かに、新しい詩誌のスタートを印象付けるような陣容がうかがえる。創刊号には北園、村野の他に、菱山修三・山中散生・笹沢美明・岡崎清一郎・田中冬二・安西冬衛の作品や、安藤一郎・長田恒雄・春山行夫の詩論、エッセイが掲載されるが、この寄稿者のうち、五十一号から五十六号までの『新領土』に執筆していたのは、村野、春山、笹沢、田中の四名のみで、同じ十六頁構成ながら、執筆者の顔触れを大きく変化させた予告通りの「各方面よりの寄稿」による「一般の純粋詩誌」が出現していた。創刊号の寄稿者には村野、北園の他に、『新領土』の同人だった春山やVOUクラブメンバーの長田も含まれているものの、寄稿者の多くは『新領土』『新技術』以外の、例えば俳句雑誌『風流陣』（昭十～十九）での交友関係等[5]から求められたと思われ、北園が「第一年第一号は想像以上に多くの寄稿を得ることが出来た。おそらく現代のベテランの詩をこの様に多く掲載した詩誌は近年稀と言つて良いであらう。」（創刊号「後記」）と自負するだけではなく、「各方面のすぐれた中堅詩人たちが第一号に作品を寄稿して『新詩論』の誕生を支持してゐる…」（木下常太郎）[6]との感想が語られるような、それまでの同人誌の枠を超えた寄稿者による順調な滑り出しが果たされている。創刊号の出来映えを受けて、北園は「…『新詩論』は現在如何なる集団の機関誌でもない。この性格をわれわれは極度に活用してあらゆる方面から優秀な詩人の寄稿を得るやうに努力する考へである。」（同）とあらためて『新詩論』の非同人誌性と、広く寄稿者を求めていく方針を語ることとなった。

Ⅲ

『新詩論』創刊については、村野、北園が創刊号「後記」でその背景等を語っていた。まず村野の発言を見れば、創刊には愛国詩が量産される状況への危機感が働いていた。村野は「詩人も詩人がもつあらゆる効用を絞つて奉公のために出発すべきで、その為にその感激性を動員して愛国詩も書きなぐらなければならない」と翼賛姿勢を強調するとともに、「莫大な実用性」の要求により、「余程詩人がしつかりしてゐないと詩の体系が混乱に陥る」危惧もあわせて指摘し、そのためにも「…詩人は詩人本来の純乎たる世界を確保し、持続しつづけなければならない。われわれはいかなる時に於てもこの領域の本拠をもちつづけることを希望するのである。」との主張を展開する。詩の「実用性」を認めつつ、詩人の本質を「純乎たる世界」の保持に求めた村野は、この詩観を追求する場として、『新詩論』を創刊したのであろう。その後も六十五号の「後記」では、「テーマ詩」の依頼が多い現状では、「自由で本当のものも書き度いと思ふ」ので「『新詩論』があることは便利だ。」と述べ、「寄稿者諸氏も恐らくさうであらうと思ふ。どうぞ自由に思ふ存分に利用していただき度いと思ふ。」との要望も付け加えている。「実用性」の詩が要請される状況の中で、『新詩論』が刊行される意味と可能性を、村野は繰り返し強調していた。

一方、北園は、『新詩論』で追求する主題を明らかにして、刊行への期待を述べていた。「後記」では村野同様、「純粋で充実した詩」への志向が述べられ、「実用性」以外の詩の作品価値の必要性が訴えられる一方、優れた詩が生まれる基盤を民族や伝統に求め、「詩の源泉はすくなくとも現

代詩の源泉地は東亜である」との確信が語られる。さらに「東亜的なもの」の可能性を「直覚を根幹とする東亜的思考法」「万葉詩人の思考の宏大性」にあると指摘し、この問題への掘り下げを自己の課題として打ち出していく。北園は既に「民族芸術理論の樹立とその適正なる実践」（「宣言」）[7]を表明し、その方向として「郷土主義への回帰」（「詩の回帰」）[8]をあげていたが、北園にとって『新詩論』は、「郷土主義への回帰」の追求を展開する場として意識されていたのであろう。創刊号の巻頭詩論で、北園は「後記」の提起を深化させ、「詩に於ける民族性」から「思考とイメイヂとの有機的関連」を探り、「純粋で充実した詩」への経路を考察するが、この論から北園は『新詩論』での「郷土主義」の探求を始めていった。

村野、北園が創刊号「後記」で示した方向のうち、五十八号以降の誌面には、まず「郷土主義」の方向が強く現れていく。創刊号から六十八号までの十二冊の誌面には、北園か村野が巻頭に詩論を載せる形が踏襲されるが、このうち創刊号の他、村野の多忙や健康問題（六十一号、六十二号「後記」）も関係して、五十九号から六十五号までの巻頭詩論とあわせ、計八編は北園が執筆していた。ほぼ数か月の連載のようになった巻頭詩論で、北園は後に『郷土詩論』[9]に収録される各論を書き継ぎ、郷土詩論の骨格を作り上げていく。この『新詩論』での連載とほぼ同時期に、北園は『郷土詩論』の巻頭論文となる「郷土詩論」[10]を発表し、郷土詩の概念をまとめているが、『新詩論』の各論では、郷土詩の「高度な、かつ厳格な詩的世界観」（「郷土詩論」）が茶道や禅に言及しながら追求され、郷土詩論の充実が図られている。加えて巻頭詩論だけではなく、創刊号から六十号までの「後記」の一部と六十七号から七十三号までのエッセイ四編も『郷土詩論』に収録され、詩でも「風」（五十七号）、「茶」（五十八号）、「冬」（五十九号）と郷土詩の発表が続けられたように、『新詩論』は、北園が郷土詩についての叙述を集中的に展開する誌詩となっていた。

さらに北園の発表と並行して、他の寄稿者からも郷土詩論と通底する民族詩論や、郷土詩の作品も発表され、『新詩論』の特色である「郷土主義」の方向はより強められていた。五十九号には笹沢美明の「ふるさと考」が載り、「懐郷心」の分析から、民族的観念としての懐郷感情の重要性が指摘される。笹沢はその後も個人と民族精神の関係を探る「『個』について」（六十二号）、民族意識とパトスを論じた「パトスの諸問題」（六十三号）と、北園の郷土詩論を補強する論考を重ね、『新詩論』での「郷土主義」論に厚みを与えている。村野もまた五十八号の巻頭詩論では、詩の評価基準として「祖国的な、郷土的な世界の中に、いかに純一にして完全な新しい事物性が獲得されてゐるか」をあげ、「…祖国的には限定された世界の中に現代詩の詩精神の純粋を求むべき」と語り、「郷土主義」と重なる視点を提示していた。笹沢、村野は論だけではなく、郷土詩と思われる詩も発表しているが、他にも郷土詩の寄稿者として、長田恒雄、木津豊太郎、八十島稔、東潤、富士武、木原孝一、城左門、鳥居良禅等があげられる。

Ⅳ

寄稿者を広く求める方針は順調に進められ、六十号「後記」によれば、創刊号からの六十号までの四巻で寄稿者は二十六名に達したとされる。具体的には、五十八号には今田久、上田保、小林善雄、木下常太郎、岩佐東一郎、竹内叔雄、黒田三郎が、五十九号には、酒井正平、町田寿衛男、木津豊太郎が、六十号には城左門、八十島稔、東潤、東郷克郎、鈴木泰助が新たな寄稿者として加わっている。これらの寄稿者を見れば、創刊号同様

の岩佐、城のような「ベテラン」が含まれるとともに、新寄稿者の半数以上は、旧『新領土』の同人（今田、上田、小林、酒井、東郷）とＶＯＵクラブメンバー（黒田、八十島、木津、東）であり、村野、北園は所属していた同人誌からの寄稿者を迎えることで、刊行基盤の強化を図ったのであろう。この傾向はその後も続き、六十三号までに「ベテラン」の佐伯郁郎の他に、『新領土』からは小川富五郎が、ＶＯＵクラブメンバーからは木原孝一、富士武、金璟麟、鳥居良禅が『新詩論』への寄稿を開始している。注目されるのは、これらのメンバーの中にはその後も寄稿を重ね、『新詩論』を支える書き手となっていく者が複数見られることで、創刊号メンバーの岡崎、長田、笹沢、安藤、村野、北園とともに、五十八号から六十三号までに登場した寄稿者のうち、五編以上の寄稿者となる者としては、木下、岩佐、町田、城、河野陸の他に今田、小林、酒井、黒田、木津、木原、鳥居があげられ、村野、北園の期待に応えるように、『新詩論』寄稿者の中核となっていく。

有力な寄稿者となった旧『新領土』同人やＶＯＵクラブメンバーの加入後の動きを見ると、木津、鳥居、木原のような郷土詩を目指す方向に向かうとともに、村野が期待したような自己の「書き度い」課題を発表していく寄稿者も出現し、『新詩論』の重層性を示す誌面も現れていた。その一人である黒田の活動では、詩論では「詩人を中心とする四つの三角形」（六十一号）を皮切りに、「ありのままにかくことについて」（六十三号）、「詩と詩人」（六十六号）と詩のリアリティの問題を考察した論が続けて発表され、「民族芸術理論」的ではない方向からの考察が述べられる。黒田はこの時期『新技術』にも、詩論を発表しているが、ここでもやはり詩の技術やリアリティが同様の視点から論じられ、『新詩論』の掲載作も、民族性に還元させない黒田の一貫したスタンスから語られていた。以後の「詩と文明」（六十九、七十一、七十二号）でも、ナショナリズムとは離れた提起が語られ、また詩でも「またあした」（五十八号）、「傍観者の出発」（六十六号）、「蝙蝠傘の詩」（七十五号）と、時局との距離を感じさせる作品が掲載されたように、黒田の作品掲載には、村野が期待した『新詩論』の方向がうかがえるのではないか。

さらに村野が期待した方向での成果として、『新領土』同人であった今田、酒井の詩作もあげられる。今田、酒井はともに同人であった『20世紀』（昭九～十一）、『新領土』で、同一タイトルを付した詩を続けて発表していくスタイルを続けてきたが、『新領土』終刊前後からは、その詩作スタイルは『意匠』（昭十四～十七）と『文藝汎論』（昭六～十九）に移して継続されていた。この二誌に続いて掲載誌となったのが『新詩論』で、今田は三誌に計十編載った「序説」名の詩のうち二編を、酒井は『新詩論』だけに「俗」名の四編の詩を掲載していくが、「序説」「俗」には二人が続けてきた独特の筆致も表出され、スタイル、表現等の詩法が引き継がれた作品となっている。このような『新領土』との連続性をうかがわせる作品掲載からうかがえるのは、やはり『新詩論』の複線性ではないか。なお付言すると、十七年七月に入隊し十九年九月に戦死した酒井の生前最後の作品発表となったのが『文藝汎論』十八年八月号に載った「作品　在北支」であった。『新詩論』五十九号から七十号までの「俗」を含めた寄稿七編のうち、掲載の経過は不明ではあるものの、六十四号以降の「覚書」、「俗」三編、「歴史」は、「作品　在北支」を除けばおそらく酒井の最後の活動を示す作品となっている。酒井が活動した最終詩誌としても『新詩論』は注目されるのではないか。

Ⅴ

六十四号以降も、「ベテラン」や、旧『新領土』同人やＶＯＵクラブメンバーの加入はその後も続き、終刊号まで概観すれば、「ベテラン」としては高祖保、上田静栄、原民喜の寄稿があり、『新技術』からは有馬明彦、矢野和幸が、『新領土』からは芦塚孝四、菊島恒（常）二、打波重信、岡田芳彦が寄稿者として登場していく。このような従来からの傾向が引き継がれる半面、寄稿者についての新たな課題も提起されていた。課題となったのは刊行の目的である「純粋至高な日本詩を発掘」するための「新しき有能な詩人」の「発見」（六十六号無署名コラム）であり、この問題と対応した方向も誌面には現れていた。その一つとして新進詩人の登用があり、村野が「最近の若い詩人群の中で、その尖鋭的な抒情詩に於て頭角を抜く」（六十七号「後記」）と評価した那辺繁の寄稿が六十七号から始まっていく。

またこの課題に応えるための方策の一つとして、投稿作品の募集と優れた作品の掲載も開始される。既に六十三号では「後記」で投稿が奨励されるとともに、投稿作品の最初の掲載として、河野陸の二詩が誌面に載り、その後も相田謙三、稲葉健吉（六十四号）、森田克彦（六十五号）と作品掲載が続いていたが、投稿作品からの優れた詩人の「発見」には、期待も強かったようで、六十六号であらためて『新詩論』の方針と投稿が奨励されることとなった。さらに吉木幸子、田久徳蔵、木村茂雄（六十九号）、秋谷豊（七十号）の作品が掲載されるが、掲載された者を見れば、『新領土』の同人であった木村や、掲載される前から『日本詩壇』（昭八～十九）『文藝汎論』等でも活動をしていた相田、吉木、田久のような力のある新進が含まれ、優れた詩人の「発見」に繋がったと思われる。さらに「発見」の方策となったのが、地方や外地の同人誌に所属する詩人への注目であった。六十一号の台湾の楊雲萍を始めに、六十二号では在中国の渡辺孝、六十四号では秋田の五百旗頭欣一と朝鮮の黄民の、六十六号では北海道の小柳透の作品が掲載され、各号の「後記」ではそれぞれの所属同人誌名も紹介される。掲載されたのは、いずれも地方性や郷土詩の性質が現れた作品で、「郷土主義」の視点からの新人発掘が図られていた。

Ⅵ

「新しき有能な詩人」の「発見」は、刊行二年目を迎えた十八年の号でも進められ、新進の紹介登用が重ねられている。六十六号「後記」で「暫く転地したい」と語り、六十七号と六十八号の「後記」で、肋膜炎のために編集を村野に任せたと記した北園は、編集に復帰した六十九号では、先に見た通り三名の投稿を採用し、同号の「後記」では懇切な批評を述べ、新人への期待を明らかにする。投稿初掲載となった河野の作品にも北園は丁寧なコメント（六十三号「後記」）を寄せていたが、この姿勢が六十九号で復活し、さらに細やかな視線が新人に宛てられ、翌七十号「後記」でも投稿の秋谷と初掲載となった国友千枝の作品に「清新の気にみちたもの」が指摘される。七十号の村野の「後記」では、北園に先行して健康を損ねていた自己とともに、編集担当からの退任を提案したところ、北園が即座に拒絶したとの話が紹介されるが、疾病を抱えつつも刊行への意欲は失われることなく、自身のエッセイと詩の掲載を続けられるとともに、その意欲は新たな寄稿者の発掘にも向けられたのであろう。さらに村野もまた新人への強い期待を表明し、誌面にも積極的に反映させていた。再度ダウンした北園に代わって七十五号の編集を担当したが、村野の「後記」によれ

ば、作品欄の大部分は「新しい詩人の努力」で占められたとされ、『新詩論』には「まだ純粋な詩精神が保留されてゐる」ことが明らかになったとの高い評価が語られている。「純乎たる世界」に詩人の本質を求めていた村野にとって、『新詩論』での新人の発掘は、北園同様、手応えと確信を与えるものであったと思われる。

『新詩論』は雑誌統制により、十八年十一月に七十七号で終刊するが、その終刊号巻頭の「終刊に就いて」で北園は、『新詩論』の「微弱ではない」「努力した結果」の一例として、「十指にあまる清新な詩人」の登場をあげていた。さらにこの号の「後記」では、村野も「数人の新進詩人」の「輩出」を「新詩論の収めた重要な功績であった」と述べ、新人発掘の実績を自負していた。北園は同様の趣旨の発言を十八年度の活動を振り返った「今年度の仕事」[11]でも繰り返し、「新詩論の刊行によって幾人かの新人を見出すことが出来た」ことで「相当の仕事を詩壇に対して果たした」との感想を語り、あらためて『新詩論』での新人発掘の成果を強調している。このような村野、北園の自負については、刊行の成果としてやはり評価してもいいのではないか。『新詩論』が終刊した翌年、北園は小冊子『麦通信』（昭十九～二十）を刊行していくが、その会員の多くが[12]、『新詩論』の寄稿者であり、その中には五百旗頭、相田、赤井喜一、那辺、吉木、小田雅彦のように、『新詩論』で新進として活動していた者も含まれている。さらに吉木、赤井、相田は、戦後北園が編集を担当した『近代詩苑』（昭二十一）に寄稿していくように、戦中の頃に活動を始め、戦後も活動を続けていく新進にとって、『新詩論』は活動の出発期での発表の場であり、その後の展開を導く貴重な場でもあった。『新詩論』の特長については、「郷土詩」を浸透させた誌詩、あるいは戦時中でも詩的価値を主張した詩誌等の視点からの評価が想定できるが、同時に新人を発掘し育成した詩誌としての評価も見ることができると思われる。

注

（1）「詩誌『詩研究』『日本詩』」（『学苑』第九二九号　二〇一八年三月）
（2）高橋新太郎「『新詩論』―戦時のモダニズム詩人たち」（高橋新太郎セレクション2『雑誌探索ノート―戦中・戦後誌からの検証』二〇一四年六月　笠間書院）
（3）ジョン・ソルト、田口哲也監訳『北園克衛の詩と詩学―意味のタペストリーを細断する』（二〇一〇年十一月　思潮社）
（4）黒坂みちる「新詩論」（安藤元雄・大岡信・中村稔監修『現代詩大事典』二〇〇八年二月　三省堂）
（5）西村将洋「神奈川近代文学館蔵　俳句雑誌『風流陣』総目次―「HAIKAI DU JAPON」の軌跡―」（『同志社国文学』第五十九号　二〇〇三年十二月）
（6）木下常太郎「詩壇時評」（『三田文学』昭和十七年三月号）
（7）VOUクラブ「宣言」（『VOU』第三十号　昭和十五年十月）
（8）北園克衛「詩の回帰」（『新技術』第三十三号　昭和十六年八月）
（9）北園克衛『郷土詩論』（昭和十九年九月　昭森社）
（10）北園克衛「郷土詩論」（『意匠』第十四号　昭和十七年四月）
（11）北園克衛「今年度の仕事」（『文藝汎論』昭和十八年十二月号）
（12）南川隆雄「地べたにでも書く・書かせる―戦時と戦後をつなぐ小詩誌『麦通信』八冊」（『いまよみがえる　戦後詩の先駆者たち』二〇一八年一月　七月堂）

資料調査では、日本近代文学館、神奈川近代文学館、本学図書館近代文庫のお

世話を頂いた。また『現代詩 1920—1944—モダニズム詩誌作品要覧—』（和田博文監修　二〇〇六年十月　日外アソシエーツ）、『現代詩誌総覧④—レスプリ・ヌーボーの展開』（現代詩誌総覧　編集委員会編　一九九六年三月　日外アソシエーツ）、『現代詩誌総覧⑤—都市モダニズムの光と影Ⅰ』（現代詩誌総覧　編集委員会編　一九九八年一月　同右）、『現代詩誌総覧⑥—都市モダニズムの光と影Ⅱ』（現代詩誌総覧編集委員会編　一九九八年七月　同右）、『現代詩誌総覧⑦—十五年戦争下の詩学』（現代詩誌総覧　編集委員会編　一九九八年十二月　同右）、『戦後詩誌総覧④　第二次世界大戦後の〈実存〉と〈思想〉』（和田博文・杉浦静編　二〇〇九年六月　同右）を活用させて頂いた。併せて厚く御礼申し上げます。

以下に『新詩論』第五十七号から第七十七号（昭和十七年二月～昭和十八年十一月）までの目次を掲げる。

【凡　例】

・号数表示は各号奥付の記述に従い、発行日を付加した。
・当該号に目次記述がないため、翌月号に記載された前号内容を基本として作成した。内題と相違する場合は内題を記述し、注記等が必要な場合は〔　〕内に加筆した。作品に付載されたジャンル名については、前号内容をそのまま記述したが、第七十七号については、作品名のみを記述した。
・前号内容に記載がない短評、新刊紹介等については、各号末尾の〔　〕内に注記した。
・原則として新字体表記に改めた。

『新詩論』目次

第五十七号（昭和十七年二月一日発行）

詩論　北園　克衛　1～2
詩　窓　菱山　修三　3
詩論　アメリカ詩への疑惑　安藤　一郎　4～5
詩　列車詩集〔「第五十七号内容」では「列車詩集」〕　山中　散生　4
鉄橋
食堂車　5
詩論　新しい出発点〔「第五十七号内容」では「新しい出発」〕　長田　恒雄　6～7
詩　橙のある園　笹沢　美明　6～7
書評　北園　克衛　8～9
詩　料理について　村野　四郎　9
記録　書物　春山　行夫　10～13
詩　笑について　岡崎清一郎　10～11
詩　軽井沢の冬　田中　冬二　12
詩　風　北園　克衛　13
詩　槲と鉄の意志ある lesson　安西　冬衛　15
後記　村野四郎・北園克衛　14～16
〔注記　三頁に短評「傾斜地」（無署名）を掲載。〕

第五十八号（昭和十七年三月八日発行）

詩論　村野　四郎　1～2
詩　序説　今田　久　3
評論　価値について　上田　保　4～5

詩　待つ日　小林　善雄　4～5
随筆　死んだ人形　木下常太郎　6～7
詩　塔　長田　恒雄　6～7
書評　村野四郎・北園克衛　8～9
詩　赤ん坊　岩佐東一郎　9
記録　矢の島の矢竹　竹内　叔雄　10～11
詩　またあした　黒田　三郎　10～11
詩　永遠の日曜日　ジュアン・ブレア　北園　克衛（訳）　12～13
記録　書物　春山　行夫　12
詩　茶　北園　克衛　15
後記　村野四郎・北園克衛　14～16
〔注記　三頁に短評「満州の民謡」（無署名）を掲載。〕

第五十九号（昭和十七年四月一日発行）

詩論　北園　克衛　1～2
詩　莟　笹沢　美明　3
詩　冬　北園　克衛　4～5
詩論　芸術性の建設　安藤　一郎　4～5
詩　俗　酒井　正平　6～7
恋の歌　酒井　正平　7
随筆　文学随想　岡崎清一郎　6～7
書評　村野四郎・北園克衛　8～9
詩　天草　町田寿衛男　9
詩論　ふるさと考　民族詩に関連して〔「第五十九号内容」では「ふるさと考」〕　笹沢　美明　10
詩　遠方の旅　木津豊太郎　10～11
五位めがないてゐた〔「第五十九号内容」には記載なし〕　木津豊太郎　11
詩　屋根　長田　恒雄　12～13
記録　フイジイ島の住民1　クリストファア・ホリイズ　北園　克衛（訳）　12～13
詩　若い雲　村野　四郎　15
後記　村野四郎・北園克衛　14～16
〔注記　三頁に短評「旧詩話会後」（無署名）を掲載。七頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第六十号（昭和十七年五月一日発行）

詩論　北園　克衛　1～2
詩　軌條　山中　散生　3
詩　故園の春　村野　四郎　4～5
詩論　科学と詩　小林　善雄　4～5
詩　鶯　八十島　稔　6～7
詩論　朗読詩について　山中　散生　6～7
書評　北園　克衛　8～9
詩　四月の歌　菱山　修三　9
詩　若い海　安藤　一郎　10～11
随筆　半夜暦　城　左門　10～11
詩　村は静謐　東　潤　12
記録　フイジイ島の住民2　クリストファア・ホリイズ　北園　克衛（訳）　12～13
詩　空襲警報発令　三月五日朝の詩〔「五月号内容」では「空襲警報発令」〕　東郷　克郎　13
詩　三日月　田中　冬二　14
詩　牛の声　鈴木　泰助　15

後記　村野四郎・北園克衛　14～16
〔注記　三頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第六十一号（昭和十七年六月一日発行）

詩論　北園　克衛　1～2
詩　故園　町田寿衛男　3
詩　深夜　佐伯　郁郎　4～5
詩論　覚書　上田　保　4～5
詩　微風　富士　武　6
詩論　詩人を中心とする四つの三角形　黒田　三郎　6～7
詩　バリ島の手　山田　有勝　7
書評　村野四郎・北園克衛　8～9
詩　初夏　楊　雲萍　9
詩　田園から　村野　四郎　10～11
詩論　埋れた楽器　木下常太郎　10～12
詩　道　木原　孝一　12
絵　刷毛目茶碗　花岡　朝生　13
詩　若菜と光と　笹沢　美明　14～15
詩論　欧羅巴文学の覚書　富士　武　14～15
後記　村野四郎・北園克衛　16
〔注記　三頁、五頁、十二頁に無題の短評（無署名）を掲載。十二頁に村野四郎による『体操詩集』の案内を掲載。〕

第六十二号（昭和十七年七月一日発行）

詩論　北園　克衛　1～2
詩　窯業と画貌　安西　冬衛　3
詩　くらし　城　左門　3～4
詩論　「個」について　民族詩考〔「七月号内容」では「『個』について」〕　笹沢　美明　4～5
詩　黄塵吹く　渡辺　孝　6～7
詩論　詩人と国家　小林　善雄　6～7
書評　北園　克衛　8～9
詩　抒情飛行　村野　四郎　9
詩　体操　殿岡　辰雄　10
詩論　詩の復古に関する覚書　木原　孝一　10～11
詩　蝶　小川富五郎　11
詩　散文的な　ほのかにも饒と西崎におくる〔「七月号内容」では「散文的な」〕　酒井　正平　12～13
詩論　傾斜せる庭　沢渡　恒　12～13
詩　鶯　岡崎清一郎　14～15
詩論　朔太郎と惣之助を悼む　安藤　一郎　14～15
後記　村野四郎・北園克衛　16
〔注記　三頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第六十三号（昭和十七年八月一日発行）

詩論　北園　克衛　1～2
詩　月夜　河野　陸　3
鵯〔「八月号内容」では「月夜、鵯」〕　河野　陸　3
詩論　ありのままにかくことについて　黒田　三郎　4
詩　遠い緑のなかで　木津豊太郎　4～5
詩　序説　今田　久　6～7
詩壇消息　編輯部　7

書評　村野四郎・北園克衛　8～9
詩　丘　金　璟麟　9
詩論　木魚行　木津豊太郎　10～11
詩　眼　山中　散生　10～11
詩論　方向の確立　長田　恒雄　12～13
詩　神話　小林　善雄　12～13
詩壇消息　編輯部　13
詩論　パトスの諸問題　民族詩考〔「八月号内容」では「パトスの諸問題」〕　笹沢　美明　14～15
詩　夏の日　鳥居　良禅　14～15
後記　村野四郎・北園克衛　16
〔注記　三頁に短評「われわれは今やらなければ駄目だ」（無署名）を掲載。〕

第六十四号（昭和十七年九月一日発行）

詩論　北園　克衛　1～2
詩　野ばら　長田　恒雄　3
詩　晩い夏　村野　四郎　4～5
詩論　古典研究の問題　小林　善雄　4～5
詩　梅の実　五百旗頭欣一　6
随感　覚書一〔「九月号内容」にはナンバーなし〕　城　左門　6～7
詩　村　黄　民　7
書評　村野四郎・北園克衛　8～9
詩　荒園　町田寿衛男　9
詩　霧　相田　謙三　10
随感　覚書　酒井　正平　10～11
詩　歌　稲葉　健吉　11
詩　葡萄作り　安藤　一郎　12～13
随感　偶感　長田　恒雄　12～13
詩　夜　北園　克衛　14～15
随感　意味のこと　木下常太郎　14～15
後記　村野四郎・北園克衛　16
〔注記　三頁に短評「字音仮名遣」（無署名）を掲載。十三頁に「詩と彫刻による健民運動」を掲載。〕

第六十五号（昭和十七年十月一日発行）

詩論　北園　克衛　1
詩　俗　酒井　正平　3
詩　桔梗　笹沢　美明　4～5
詩論　詩人みづからの生活　安藤　一郎　4～5
詩　蝶　森田　克彦　6～7
詩論　詩的技術の座標　木原　孝一　6～7
書評　村野　四郎　8～9
詩　泡沫期遁走　木津豊太郎　9
詩　火　村野　四郎　10～11
随筆　書物随筆1　岩佐東一郎　10～11
詩　夏の苑　有馬　明彦　12～13
随筆　日本と西洋　上田　保　12～13
詩　萩　八十島　稔　14～15
随筆　覚書（二）〔「十月号内容」では「覚書　二」〕　城　左門　14～15
後記　村野四郎・北園克衛　16
〔注記　三頁に無題の短評（無署名）を掲載。十三頁に村野四郎「詩集　抒情飛行について」を掲載。〕

第六十六号（昭和十七年十一月一日発行）

詩論　村野　四郎　1～2
詩　祭典の夜　小柳　透　2
詩　田園記聞　岡崎清一郎　4～5
詩論　詩と詩人　黒田　三郎　4～5
詩　秋　相田　謙三　6～7
詩論　詩と言葉　長田　恒雄　6～7
書評　村野四郎・北園克衛　8
詩　俗　酒井　正平　9
詩　杉林　長田　恒雄　10～11
随感　季節と時間　小林　善雄　10～11
詩　朝　河野　陸　12～13
随感　詩叢襍記　八十島　稔　12～13
詩　傍観者の出発　黒田　三郎　14～15
随筆　書物随筆（2）〔「十一月号内容」にはナンバーなし〕　岩佐東一郎　14～15
後記　村野四郎・北園克衛　16

〔注記　三頁に無題の短評（無署名）を掲載。十三頁に無題のコラム（無署名）を掲載。〕

第六十七号（昭和十七年十二月一日発行）

詩論　村野　四郎　1～2
詩　氷雨　岡崎清一郎　3
詩論　手紙―文学の倫理性に就て―〔「十二月号内容」では「手紙」〕　今田　久　4～5
詩　龍のひげ抄　高祖　保　6～7
随想　冬夜記　長田　恒雄　6～7
翻訳　現代独逸抒情詩抄　女子円盤投選手〔「十二月号内容」では「女子円盤投選手」〕　ギユンテル・ガブレンソ　笹沢　美明（訳）　8
書評　村野　四郎　8～9
詩　業　那辺　繁　9
詩　風景　芦塚　孝四　10～11
随想　白秋の告別式に　安藤　一郎　10～11
詩　前夜　木津豊太郎　12～13
随想　書物随筆（3）　岩佐東一郎　12～13
詩　撃滅の年　菊島　恒二　14～15
随想　身辺抄〔「十二月号内容」では「身辺抄」〕　北園　克衛
絵　14
机
後記　村野四郎・北園克衛　16

〔注記　巻頭頁、奥付とも第六十六号と誤記。三頁、五頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第六十八号（昭和十八年一月一日発行）

詩論　村野　四郎　1～2
詩　青い襯衣　安西　冬衛　3
詩　求道　城　左門　4～5
詩論　詩の像に関する考察　木原　孝一　4～5
詩　栗の実　安藤　一郎　6～7
随筆　郷土随感　鈴木　泰助　6～7
訳詩　現代独逸抒情詩抄　変化〔「一月号内容」では「変化」〕　ケーテ・エル・カモツサ　笹沢　美明（訳）　8
書評　村野　四郎　8～9

詩　海洋歌　岡崎清一郎　9
詩　水仙　笹沢　美明　10〜11
随筆　カマキリ記　安藤　一郎　10〜11
詩　神の国　小林　善雄　12〜13
随筆　冬日記　長田　恒雄　12〜13
詩　序説　今田　久　14
詩　歴史　酒井　正平　15
後記　北園克衛・村野四郎　16
〔注記　三頁に無題の短評（無署名）を掲載。十五頁に新刊紹介「新しい詩書」（無書名）を掲載。この号から「内容」に頁記載なし。終刊号までは通し頁。〕

第六十九号（昭和十八年二月一日発行）

詩　叢林　北園　克衛　17
詩論　詩と文明　黒田　三郎　18〜19
詩　児童画　吉木　幸子　20〜21
随筆　錯覚　小林　善雄　20〜21
詩　武蔵野〔「二月号内容」では「武蔵野。恋。」〕　那辺　繁　22
恋　那辺　繁　23
随筆　身辺抄〔「二月号内容」では「身辺抄」〕　北園　克衛
詩集　22〜23
古道具　23
詩　風　鳥居　良禅　24
書評　村野四郎著詩集抒情飛行　岡崎清一郎　24
詩論　大陸詩人結集の為の理論　宮古田　龍　25〜28
詩　一つの風は　田久　徳蔵　26〜27
詩　妻よ　楊　雲萍　28〜29
随筆　グウ・ダン　宮崎　辰親　29〜31
詩　中心から遠ざかつて海を見る〔「二月号内容」には記載なし〕　木村　茂雄　30〜31
後記　村野四郎・北園克衛　32
〔注記　十七頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第七十号（昭和十八年三月一日発行）

詩　木の像　木津豊太郎　33
詩論　感動の心理性〔「三月号内容」では「感動の心理」〕　安藤　一郎　34〜35
詩　冬日　秋谷　豊　36
随筆　京の寺　城　左門　36〜37
詩　谷間　国友　千枝　37
詩　神は近くに　シュテファン・アンドレス　笹沢　美明（訳）　38〜39
随筆　青銅の鏡　木原　孝一　38〜39
詩　俗　酒井　正平　40
書評　詩集「風土」について　村野　四郎　40
随筆　ロダンのお花さん　殿岡　辰雄　41〜42
詩　家　岡崎清一郎　42〜43
随筆　数と人形　今田　久　43〜45
詩　千本松原　町田寿衛男　44〜45
随筆　微恙記　長田　恒雄　46〜47
詩　韮　北園　克衛　46〜47
後記　村野四郎・北園克衛　48
〔注記　三十三頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第七十一号（昭和十八年四月一日発行）

詩　高原の歌　佐伯　郁郎　49
詩論　詩と主題　中桐　雅夫　50〜51
詩　風景点描　山中　散生　52
詩論　新しい抒情詩　木下常太郎　52〜53
詩　夜明けのいつとき　安藤　一郎　54〜55
詩論　万葉と芭蕉　富士　武　54〜55
詩　多々良浜　小松　隆　56
詩論　詩と文明　黒田　三郎　57〜59
詩　菫　笹沢　美明　58〜59
詩　甲斐猿橋　五百旗頭欣一　60〜61
評論　風景について　上田　保　60〜61
詩　海辺の旅　小柳　透　62
評論　近頃無礼録　岩佐東一郎　62〜63
詩　寒　那辺　繁　63
後記　村野四郎・北園克衛　64
〔注記　四十九頁に短評「ポオズのつまらなさに就いて。」（無署名）を掲載。五十六頁、六十一頁に「新刊詩書」（無署名）を掲載。〕

第七十二号（昭和十八年五月一日発行）

詩　伝記未詳　岡崎清一郎　65
詩論　現代詩の形体に就て〔「五月号内容」では「現代詩の形態に就て」〕　笹沢　美明　66〜67
詩　春の仏―亡き妻に〔「五月号内容」では「春の仏」〕　城　左門　68〜69
詩論　言葉の無駄　山中　散生　68〜69
詩　梅　畠山　義郎　70
随筆　精神の衛生　小林　善雄　70〜71
詩　午後　矢野　和幸　71
詩論　日本民族詩　ギリシヤ詩の連想〔「五月号内容」では「日本民族詩」〕　石橋孫一郎　72〜73
詩　春野　河野　陸　73
詩　大和　町田寿衛男　74〜75
詩論　詩と文明　黒田　三郎　74〜75
詩　郊外風景　渋沢　均　76〜77
随筆　青銅の鏡　木原　孝一　76〜77
詩　北京平信　鈴木　出　78
随筆　茶碗　北園　克衛　78〜79
詩　山の湯　北条　光　79
後記　村野四郎・北園克衛　80
〔注記　六十五頁に短評「片鱗について。」（無署名）を掲載。七十五頁、八十頁に「新刊詩書」（無署名）を掲載。〕

第七十三号（昭和十八年六月一日発行）

詩　鶯　鳥居　良禅　81
詩論　ことばの限界　高祖　保　82〜83
詩　皿　北園　克衛　84〜85
随筆　肉体の衛生　小林　善雄　84〜85
詩　木蓮　長田　恒雄　86〜87
随筆　十二神将　城　左門　86〜87
詩論　宮沢賢治について　安藤　一郎　88〜89
詩　早春の丘　安藤　一郎　90〜91
随筆　俳句　北園　克衛　90〜91

詩　柿の頌　鈴樹　昌　92
随筆　天翔ける美神　鳥居　良禅　92
詩　大河となりて　上田　静栄　93
随筆　掌記　国友　千枝　93
詩　閑居　東　潤　94～95
随筆　春安記　長田　恒雄　94～95
後記　村野四郎・北園克衛　96
〔注記　八十一頁に無題の短評（無署名）を掲載。八十三頁に新刊紹介「新刊」（無署名）、八十九頁に「相模野抄八幡城太郎著」（無署名）を掲載。〕

第七十四号（昭和十八年七月一日発行）

詩　月夜春秋　河野　陸　97
詩論　文語か口語か　現代詩形体の問題〔「七月号内容」では「文語か口語か」〕　笹沢　美明　98～99
詩　像　木津豊太郎　100～101
随筆　桐の花　五百旗頭欣一　100～101
詩　丸の内にて〔「七月号内容」では「丸ノ内にて」〕　殿岡　辰雄　102～103
随筆　目の背面を見る人〔「七月号内容」では「月の背面を見る人」〕　今田　久　102～103
散文　古狸　三木　偵　104～105
詩　石　笹沢　美明　106～107
随筆　よむに耐へるものについて　黒田　三郎　106～107
詩　函嶺　町田寿衛男　108～109
随筆　パナマ帽　原　民喜　108～109
詩　鉢　北園　克衛　110～111
詩論　詩の橋　木原　孝一　110～111
後記　村野四郎・北園克衛　112
〔注記　九十七頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第七十五号（昭和十八年八月一日発行）

詩　時間　石橋孫一郎　113
詩論　洋画の富士山　安藤　一郎　114～115
詩　海洋歌　岡崎清一郎　116
詩論　言葉について　中桐　雅夫　116～117
詩　四月　島田廉太郎　117
詩　春の歌　谷中　慶二　118
随筆　苔の庭　鳥居　良禅　118～119
詩　初夏　五百旗頭欣一　119
書評　村野　四郎　120～121
詩　潮騒　打浪　重信　121
詩　蛇　木原　孝一　122
随筆　詩集出さざるの記　小林　善雄　122～123
詩　早春　那辺　繁　123
詩　蝙蝠傘の詩〔「八月号内容」では「蝙蝠の詩」〕　黒田　三郎　124～125
随筆　人情の自然・蓮の花など〔「八月号内容」では「人情の自然」〕　今田　久　124～125
詩　神像　小田　雅彦　126～127
随筆　富士岡村記　木原　孝一　126～127
後記　村野　四郎　128
〔注記　百十三頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第七十六号（昭和十八年九月一日発行）

詩　秋　村野　四郎　129
詩論　詩に於ける倫理性の問題　山田　有勝　130～131
詩　朝やけ　那辺　繁　132～133
随筆　死について　笹沢　美明　132～133
詩　沼（「九月号内容」では「沼炉辺で」）　赤井　喜一　134
　炉辺で　赤井　喜一　135
随筆　氷の部屋・黄昏の部屋　高祖　保　134～135
随筆　葡萄園遊行　安藤　一郎　136～137
詩　春の谷川（「九月号内容」では「詩春の谷川」）　河野　陸　138
随筆　大入袋　岩佐東一郎　138～139
詩　心　岡田　芳彦　139
詩　心（「九月号内容」では「心さびしとき」）　上田　静栄　140
　さびしきとき　上田　静栄　141
随筆　とりかぶとの周囲　今田　久　140～141
詩　木の像　木津豊一郎　142
随筆　高原の夏　中村　千尾　142～143
詩　巷　小林　善雄　143
後記　村野四郎・北園克衛　144

〔注記　百二十九頁に無題の短評（無署名）を掲載。〕

第七十七号（昭和十八年十一月一日発行）

終刊に就いて　村野四郎・北園克衛　145
現代詩のみち　長田　恒雄　146～147
山茶花　笹沢　美明　148～149
詩と戦力　木下常太郎　148～149
愛鷹山　町田寿衛男　150～151
想像の犬　木津豊太郎　150～151
萩　鳥居　良禅　151
気儘な美食家　笹沢　美明　152～153
唄　矢野　和幸　154
覚書（三）　城　左門　154～155
夕ぐれ　河野　陸　155
　山宿の夜　谷　健司　156
　雨の記　今田　久　156～157
石　金　郁　157
紀の秋　八十島　稔　158～159
　今日の渓流　鳥居　良禅　158～159
後記　村野四郎・北園克衛　160

（いのくま　ゆうじ　日本語日本文学科）